

## 近世後期における長林寺の信仰圏

駒澤大学禅文化歴史博物館嘱託 皆川 義孝

### はじめに

長林寺をはじめ、寺院は宗教活動の施設であり、創建から現在に至るまで途絶えることなく続いているもの一つに寺院への信仰があげられます。また、それぞれの寺院を信仰する人びとの広がりや信仰圏といえます。

信仰と信仰圏は、寺院を構成する僧侶・檀家や信徒などの人的な環境、産業や流通などの社会的な環境、寺院が立地する風土などの自然的環境により、その内容には多種多様な形態がみられ、時代を経るごとに変化しています。したがって、それぞれの寺院の歴史や特徴を見る上で重要な部分かと思えます。

人文地理学の分野では、信仰と信仰圏は経済的・社会的な諸事象と互いに関連しながら、寺院が立地する地域を形づくる重要な構成要素であるといえます。すなわち、地域の景観を見る上でも寺院やその信仰・信仰圏は重要な要素といえます。

江戸時代の長林寺には、山川村の産業や流通などの経済活動を通じて、江戸の浅草・日本橋にも信者が存在しました。この様に、寺院が立地する地域の経済活動により広範囲な信仰圏が形成される場合もありました。

日蓮宗や浄土真宗と比較して、曹洞宗などの禅宗や真言宗の盛んな地域には、さまざまな信仰の対象が存在し、多くの宗教施設が設置されるといわれています。長林寺は禅宗の中の曹洞宗に属する寺院です。境内には、観音堂や道了堂など庶民信仰の施設が存在します。また、観音堂や道了堂は、それぞれ別の信仰や信仰圏を形成しています。したがって、長林寺は曹洞宗寺院としての信仰、観音堂や道了堂などの庶民信仰など、さまざまな信仰や信仰圏が融合し形成された寺院といえます。

つぎに、信仰や信仰圏に関する資料ですが、古文書、古記録などの文献資料のみならず、仏像・木像・位牌・経典・絵画・墨蹟など寺院に伝来する資料、毎日の読経をはじめ日々営まれる諸行事なども資料となります。この様に、信仰や信仰圏の資料は多種多様、重層的な内容で、現在でも信仰の対象として存在しているものもあります。これらの資料群は内容が多岐にわたるため、一人で調査・分析することは困難です。したがって、多分野の研究者による総合的な分析が求められ、「研究の学融合の場」となりうる分野といえます。

以上の点をふまえ、長林寺の信仰や信仰圏について、特に江戸時代の長林寺の構成員とその活動、文化八年（一八一二）の「大般若経」勸進を中心に見ていきたいと思います。なお、今回の報告は長林寺史編纂および平成十七年（二〇〇五）五月に開催されました道了尊例大祭での寺宝展「長林寺に伝わる人びとの祈り」展の成果をもとにお話させていただきます。

#### 一 江戸時代中期の長林寺の施設と構成員

江戸時代中期までに、長林寺には足利坂東十二番（現在は十四番）の札所であった観音堂、道了堂などの庶民信仰の施設が存在しました。特に、道了堂に奉納された絵馬、参詣者に配布したお札の版木が残っています。したが

って、江戸時代中期までに長林寺には様々な信仰が定着していたといえます。

長林寺で所蔵する「過去帳」の十七世紀から十九世紀中頃の記載には、沙弥が十一人、上座が四人、法印が二人、座元・行者がそれぞれ一人ずつ確認できます。それを一覧にしたのが、表1です。

表1より、沙弥の人物は長林寺住持弟子のほか、休心坊、高松坊、上座・座元は長林寺、高寂寺（廃寺）の弟子や四国行者、法印は高松坊、行者は五大院の弟子であることがわかります。特に、高松坊は江戸時代に京都聖護院配下の修験者で、弘化四年（一八四七）頃には足利の助戸村に住し、長林寺の檀家でもあった修験者です。また、休心坊、四国行者、五大院なども、高松坊同様に修験的な活動をしていた宗教者と考えられます。

この様に、十七世紀から十九世紀にかけて、長林寺には高松坊をはじめ、修験的な活動を行っていた宗教者が構成員として存在していました。

長林寺に存在した修験的な宗教者の活動に関する資料が、宝暦五年（一七五五）の「金剛山頭密護摩祈祷札」です。ここで、この祈祷札に書かれた文言を紹介します。

#### 【資料1】

宝暦五年 長林寺代

金剛山奉頭密護摩供如意祈修

九月吉日 永観坊勤之

資料1より、宝暦五年九月に長林寺の代理として、永観坊が「金剛山頭密護摩祈祷」を行ったことを証明する札であることがわかります。この祈祷が行われた会場は、長林寺であったと考えられます。この永観坊も、先に登場した高松坊と同様に、長林寺に存在した修験的な宗教者であったといえます。

この様に、十七世紀から十九世紀中頃には沙弥・法印などを名乗る修験的な宗教者が多数存在するなど、長林寺は重層的な宗教者により構成されていた寺院であったといえます。また、修験的な宗教者は長林寺で営まれた祈禱活動の一躍を担っていたといえます。

## 二 文化八年の「大般若経」の勧進活動と長林寺の信仰圏

現在、長林寺の本堂には文化八年（一八一）に足利や江戸の人びとに勧進して、納められた六百卷の「大般若経」があります。長林寺の「大般若経」は、近年、檀家の方々の援助により、修復されました。

「大般若経」は、先祖供養、現世安穩、天変地異を除く功德があると信じられていました。このため、江戸時代に各地の寺院で「大般若経」が整備されました。また、「大般若経」は、すべての経典を一字一句声に出して読むのではなく、各巻のはじめの七行、中五行、後三行などを音読し、あとは経典を操って翻転する「転読」が行われました。長林寺では、毎年、正月の修正会にて「大般若経」の転読を行っています。

「大般若経」六百卷全部を揃えるには、多額の金銭が必要でした。下総の寺院、円福寺が文政二年（一八一）に、江戸の日本橋にあった書店、須原屋から「大般若経」六百卷を購入しています。この時の購入価格は約三十六両でした。また、須原屋は「大般若経」を注文に来店した人物には、店の二階へ通し会席料理を振舞ったといえます。したがって、店主にとっては「大般若経」は大きな利益を生み出す商品であったといえます。

寺院の中には、一人の大旦那により揃えられた「大般若経」を所持している寺院もありますが、多くの場合、各地に出向いて寄付者を募る勧進を行い、購入費用を集めています。そして、購入費用を寄付してくれた人物の名前などを、「大般若経」の扉の裏面に墨書しました。



泰(泰玄歩道丸)  
□

□  
□<sub>(名主丸)</sub>  
□

同  
左右兵衛  
印

同  
孫兵衛  
印

同  
政右衛門

組頭  
三之(丞丸)  
□

同  
六郎兵衛  
印

同  
□  
□<sub>(丞丸)</sub>  
□<sub>(丞丸)</sub>  
印

組頭  
定右  
□<sub>(丞丸)</sub>  
□<sub>(丞丸)</sub>

太左衛門  
印

資料2は、虫損などにより判読できない部分も多数ありますが文化八年の「大般若経」勧進は、当時の長林寺住職であった泰玄歩道や檀家の発願により開始されたといえます。

前半部分によれば、安永八年（一七七九）に長林寺住職の「万□和尚」の発願により勧進が行われ、長林寺に収められた旧「大般若経」がありました。享和年間（一七一六〜一七二六）の火災で焼失してしまったことがわかります。「万□和尚」ですが、長林寺蔵「過去帳」などによれば、長林寺二十世の満全知足と思われませんが、安永二年に没しており、検討を要する部分かと思えます。ついで、後半部分より安永八年の「大般若経」が焼失してしまつたため、再び現在の「大般若経」の購入費用を勧進することを発願したことが分かります。

では、実際にどのような地域で勧進を行い、購入費用を集めたのでしょうか。現在の「大般若経」に表紙裏に記された寄付者名や所在地が判読できるものを地図上に示したのが図1です。

図1より、文化八年の「大般若経」寄付者は、足利では、山川・八柵・大沼田村などの長林寺近隣の村、助戸・勧農・猿田・常見・川崎・田中・朝倉・和泉・中里・塩嶋・渋垂・小生川村、梁田宿、加子・野田村などの渡良瀬川沿いの村、山間部の月谷・利保村に寄付者が点在しています。この様に、足利では渡良瀬川沿いの村々に寄付者が存在し、特に小生川村・月谷村に寄付者が多く存在することが特徴としてあげられます。

江戸では、吉原のある大門通り、浅草、両国、日本橋などの隅田川沿いの町々に寄付者が点在しています。

江戸時代の河川水運の研究によれば、十七世紀後半には、足利と江戸を結ぶ河川水運が形成されていたといわれています。したがって、文化八年の「大般若経」の寄付者が足利と江戸に点在した背景には、渡良瀬川・隅田川を結ぶ水運がひとつの件であったことが想定されます。

つぎに、江戸の地域的な特徴について、もう少しみていきます。長林寺の道了尊は、神奈川県南足柄市にある曹洞宗寺院の最乗寺を拠点に広まった信仰です。昭和五十六年（一九八一）に最乗寺で出版した『道了尊帝都御巡錫記』によれば、天明四年（一七八四）、文政二年（一八一九）の二度にわたり、江戸で最乗寺道了尊の出開帳が行われ、この時の高札場は浅草回向院、西両国広小路、浅草雷神門表、下谷三枚橋下、田町札之辻などに設けられました。また、この二回の出開帳では、江戸の天下祭に匹敵する人びとが訪れ、大変な賑わいをみせたといえます。なお、長林寺の「大般若経」五六八巻の寄付者は馬喰町二丁目の伊勢屋ですが、明治四年（一八七一）に行われた最乗寺道了尊の出開帳で宿舍となっています。

この様に、「大般若経」の江戸の寄付者が点在する地域は、最乗寺道了尊の信仰が浸透していた地域と重複していたといえます。すると、長林寺と江戸の町々は河川水運だけでなく、道了尊信仰でも結びつきがあった地域といえます。

では、足利から離れた江戸で誰が、寄付者の勧進を行っていたのでしょうか。勧進で活躍したのは、長林寺の構成員であった修験的な宗教者であった可能性が高いです。この点につきましても、今後、江戸の勧進地域の調査を進め、解明していきたいと思えます。

#### おわりにかえて

江戸時代の長林寺には、修験的な宗教者が存在し、長林寺の祈祷活動や勧進活動の一躍を担っていたことが考えられます。こうした活動を通じて、長林寺の広域的な信仰圏が形成されたといえます。この点は、長林寺が立地する山川地域をはじめ、足利地域の江戸時代の歴史を考える上でも重要な部分かと思えます。



また、宗教史の面でも、江戸時代の寺院については本末制度や檀家制度、宗派の枠内で考える傾向が強かったと思われませんが、今回の話はこの点への再検討が必要であることを提示できるものと考えられます。

今回、長林寺に存在した修験的な宗教者などの実際の活動についてはまだ未解明な部分も多いですが、今後、江戸の勧進地域などでの資料収集や聞き取り調査を進め解明していかなければならないことを課題点としてあげて、報告を終わりたいと思います。

〔参考文献〕

- 奥田 久『内陸水路の歴史地理学的研究——近世下野国の場合——』（大明堂、一九七七年）
- 奈良哲三「近世の振興と一揆」〔一揆〕四、東京大学出版会、一九八一年）
- 『道了尊帝都御巡錫記』（大雄山最乗寺、一九八一年）
- 『古河市史』通史編（一九八八年）
- 齊藤貞夫『武州・川越舟運 新河岸川の今と昔』（さきたま出版会、一九九〇年）
- 石井英也「文化景観」〔『地理学講座』四 地域と景観、古今書院、一九九一年）
- 吉田伸之・高村直助編『商人と流通——近世から近代へ——』（山川出版社、一九九二年）
- 丹治健蔵『近世交通運輸史の研究』（吉川弘文館、一九九六年）
- 三木一彦「村上片町庚申堂再建をめぐる地域的背景——万延元年開帳時の寄進帳を通して——」（『日本史学集録』二二二、一九九九年）
- 同「江戸における三峰信仰の展開とその社会的背景」（『人文地理』五三—一、二〇〇一年）

田中圭一「四銚子円福寺・釈迦涅槃図の世界」(『千葉県の歴史』別編 民俗二、二〇〇二年)

阿部綾子「銚子における「旅漁師」と「旅商人」の定着過程に関する一考察」(『国立歴史民俗博物館研究報告』

第一一五集、二〇〇四年)

鈴木俊幸「近世日本における大般若経流通の一相」(『中央大学国文』四七、二〇〇四年)

『長林寺史ブックレット1 長林寺に伝わる人びとの祈り』(長林寺、二〇〇五年)

表1 過去帳にみえる沙弥・法印・座元・上座・行者

No.	戒名	死去年	西暦	備考
1	伝灯正先達権大僧都法印永尊	延享 2年	1674	勸濃村 五大院
2	恵心妙智沙弥	延宝 3年	1675	中村 長嶋喜六母
3	即雄是心沙弥	延享 4年	1676	中村 長嶋新右衛門父
4	小林正斎沙弥	延享 4年	1676	小林監物父
5	西念光雲沙弥	延宝 5年	1677	北屋敷 佐治兵衛
6	実叟道参沙弥	延宝 8年	1680	
7	東岸順西沙弥	天和 2年	1682	
8	通山道意沙弥	天和 3年	1683	門前 佐五兵衛父
9	安室幽心沙弥	元禄12年	1699	初谷所左衛門弟
10	一如函心沙弥	元禄12年	1699	初谷所左衛門弟
11	浄雲沙弥	元禄13年	1700	
12	全安笑牛沙弥	宝永 2年	1705	勸濃村 新五衛門兄
13	智翁調心沙弥	宝永 2年	1705	門前 川田七郎兵衛兄
14	罷心自休沙弥	宝永 3年	1706	
15	伝灯正先達為俊法印	宝永 4年	1707	助戸村 高松院(坊カ) 隠居
16	即性得心沙弥	宝永 6年	1709	八柵村 三左衛門子
17	太嶺宥仙法印	宝永 7年	1710	禅龍和尚父
18	即岩休心沙弥	正徳 2年	1712	小林長左衛門父
19	桃雲学心沙弥	正徳 3年	1713	柿田弥右衛門
20	透巡無関座元	正徳 5年	1715	小林長左衛門 四国行者
21	周寒朴道上座	享保元年	1716	森山源左衛門孫
22	収応善慶沙弥	享保 6年	1721	門前 茂木森助父
23	修学幸善上座	享保 8年	1723	高寂寺伝兵衛弟
24	通山源意沙弥	享保11年	1726	八柵村 所左衛門
25	貞林沙弥尼	享保12年	1727	
26	了弁優塞行者	享保12年	1727	勸濃村 五大院弟子
27	即翁直心沙弥	享保17年	1732	八柵村 喜衛門祖父
28	荷葉通円上座	享保18年	1733	中村 吉兵衛
29	勇禅沙弥	享保19年	1734	南門前 想兵衛
30	月心光円沙弥	元文 6年	1741	中村 善右衛門父
31	小室静林上座	寛延 3年	1750	小林平吉父
32	一相休心沙弥	宝暦 2年	1752	門前 休心坊
33	玉窓貞進沙弥尼	宝暦 3年	1753	門前 喜八祖母
34	廓誉一夢沙弥	宝暦 3年	1753	中門前 市衛門弟
35	実相妙真沙弥	宝暦 3年	1753	八柵村 寺内三左衛門
36	知教別伝沙弥	宝暦 6年	1756	中村 金子源六弟
37	桂陰珠清沙弥尼	宝暦 9年	1759	歩嶽母
38	実翁全心沙弥	明和 7年	1770	当寺19世和尚弟子
39	大安機道沙弥	天明元年	1781	助戸村 日下部彦惣 (⇒高松坊)
40	実山了道沙弥	天明 6年	1786	中村 金子孫市
41	定心沙弥	天明 7年	1787	八柵村 寺内伊兵衛兄
42	定心沙弥	天明 7年	1787	八柵村 寺内伊兵衛兄
43	黙心自休沙弥	寛政 2年	1790	八柵村 石川治左衛門子
44	恵林幸道沙弥	文化 2年	1805	中門前 飯塚幸助
45	徳生慈雲沙弥	文化 2年	1805	橋本村 初谷定右衛門子
46	一誉鉄心沙弥	文化11年	1814	八柵村 石川喜右衛門
47	巖心貞重沙弥	文化12年	1815	南 茂木十左衛門
48	安叟要全沙弥	文政13年	1830	館林谷越村之産 当寺弟子 (⇒岡見半太夫奉納法華経箱細工者)
49	群青沙弥			門前 川田先祖十六日仏

\*本表は、長林寺蔵「過去帳」より抽出し作成した。

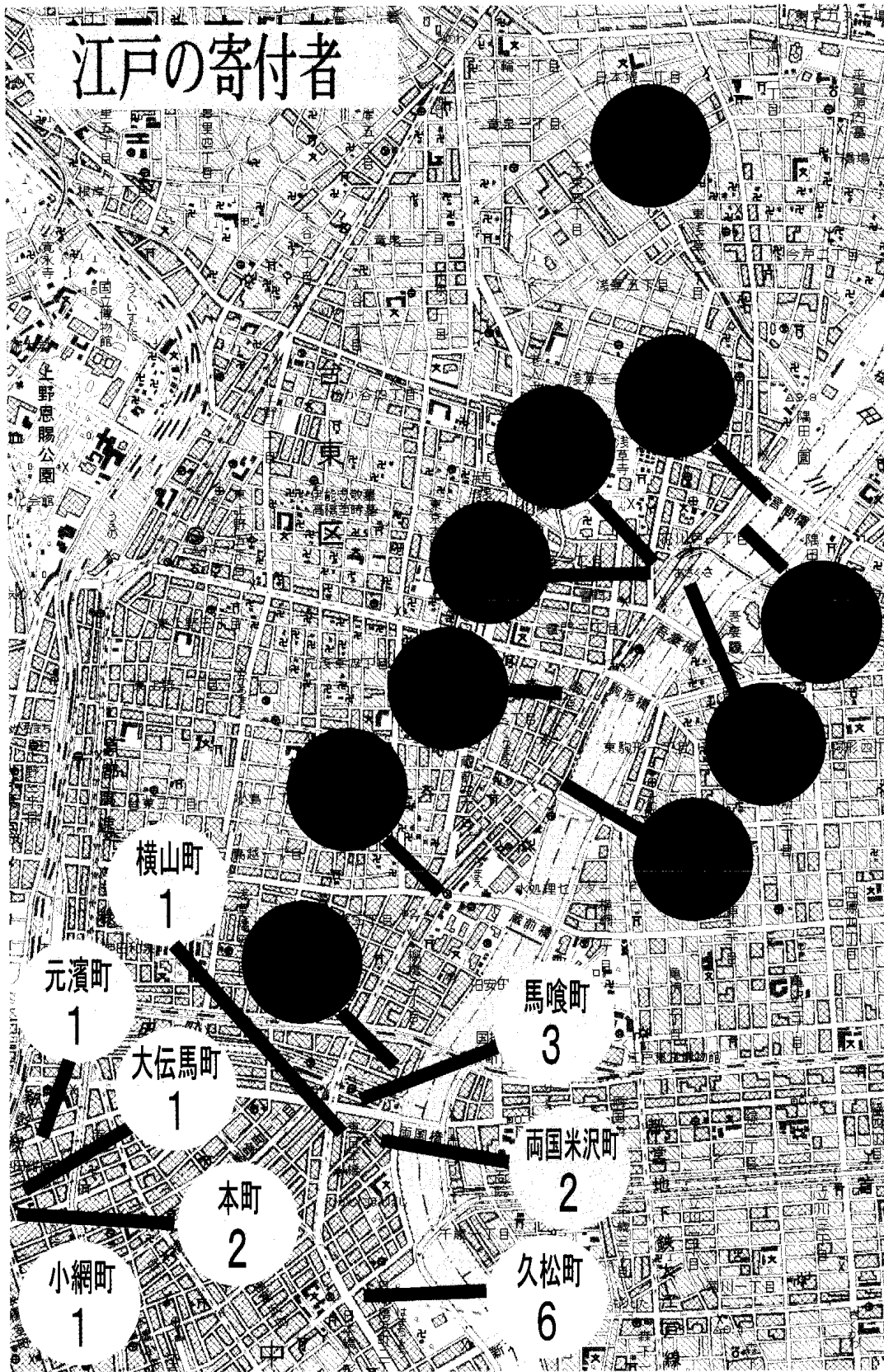
# 図1 「大般若経」の寄付者分布図

長林寺の「大般若経」奥書に書かれた地名およびその数を図にしました。

この図から、「大般若経」の足利の寄付者は渡良瀬川沿い、江戸の寄付者は浅草・日本橋の墨田川沿いに存在したことがわかります。



# 江戸の寄付者



月谷村  
23

田中村  
8

朝倉村  
2 和

(1) 本図では、足利(黄色)、浅草界限(赤色)、両国・日本橋界限(水色)で色分けしました。

(2) 地名の下の数字は、「大般若経」奥書に登場する数字の合計です。